

日本代表女子チームへの心理的サポートの実践

Report on Psychological Supports for a Japan National Female Team

キーワード：メンタルトレーニング、心理テスト、チーム、心理的スキル

阿江 美恵子

遠藤 俊郎¹⁾

三宅 紀子²⁾

杉山 哲司³⁾

¹⁾ 大東文化大学
スポーツ・健康科学部

²⁾ 首都大学東京
人間健康科学研究科

³⁾ 日本女子大学家政学部

1. 緒言

2000年4月に日本スポーツ心理学会は、メンタルトレーニング指導士制度を発足させた。これはスポーツ選手の競技力向上を目的としたメンタルトレーニングに携わる専門家の資質の向上を目指し、安定したレベルのサポートが提供されることを目指したものである。メンタルトレーニング指導のライセンスについては、1990年代に国際メンタルトレーニング学会、応用スポーツ心理学会（アメリカ）などで整備されており、スポーツ心理学会に所属する会員の職業的な幅を広げる領域として関心を惹きつけている（高妻、2002）。メンタルトレーニングは、競技スポーツ選手の競技力向上に関わる心理的スキルの指導や心理的な問題解決のためのコンサルティング（相談）から構成される。しかしメンタルトレーニングの効果やトレーニングの方法などについては発展途上にある。

阿江（2003）は、実践的研究雑誌であるThe Sport Psychologist誌を1992～2002年にわたって概観し、メンタルトレーニング全般を扱った論文と、メンタルトレーニングを用いて直接個人やチームに介入した内容の論文をまとめている。それによるとメンタルトレーニング研究は、心理的スキルトレーニン、心理的な介入や個人またはチームへのコンサルティング、メンタルトレーニング自体のあり方やライセンス教育の内容、さらに、掲載論文に対するコメント論文と内容は多岐にわたっていた。高妻

（2002）によれば、用語としては、心理的コンサルティングという語がメンタルトレーニングや心理的サポートを総称して用いられているという。

日本の競技スポーツでもメンタルトレーニングの様々な試みがなされてきた（松田ほか、1986、1987、1988、1989；猪俣ほか、1991、1992、1993、1994、1995、1996、1997、1998、1999；乾、1996；白石、1997）。ナショナルチームへの心理的サポートの試みは、福岡ユニバーシアード大会のサッカーチーム（乾、1996）、アトランタオリンピックの女子バスケットボールチーム（白石、1997）などで試みられた。これらの試みは評価できるものの、実施者の主観的な記述が多く、客観的なデータによる評価がほとんどない。筆者ら（Ae et al., 2001; Endo et al., 2001; Miyake et al., 2001）は、ある種目の日本女子ナショナルチームへの3ヵ年にわたる心理的介入を実践しチームへの介入の問題を検討し続けたが、本研究開始時点でチーム介入の研究は少なかった（阿江、2003）。

チームへのコンサルタント活動としては、Bull（1995）が比較的長い時間に及ぶ「イングランド女子クリケットチームとの5年の相談プログラム」を報告している。その介入を紹介するとメンタルスキルトレーニングの導入と教育、いくつかの大会への準備と思考、ワールドカップの事前準備、ワールドカップへの最終準備とその場での対策、の4段階で進められていた。

近年、チームに対するメンタルトレーニングの実践も増えており、2011年の日本スポーツ心理学会第

38回大会ではチームを対象にしたメンタルトレーニングのサポート研究が4題報告されている。

心理的サポートの中心的な課題は競技力向上であるが、チームでは集団内の個々の成員の多様性がチームの凝集性を低下させることもある。チームスポーツへの心理的サポートは一人で行うことが主流になっているが、サポートもチームで行えると考えて本研究を開始した。その時点で内容についての客観的な資料の蓄積はあまり多くなかった。

本研究グループはX年4月から対象チームに心理的サポートを実施した(杉山ほか、1999;三宅ほか、1999)。チームはX年12月のアジア大会は4位で、その後のX+2年のシドニーオリンピック予選敗退という結果で、サポートは監督・コーチ新のため終了した。

本研究は上記のサポートのまだ公表されていないチームへ心理的サポートのプロセスを報告することを目的とした。具体的には各種心理テストのデータを基にして、チームの心理的特性、個々の選手の心理的特性を示すとともに、サポートの詳細を報告した。選手個々の心理的特性はチーム全体としての組織的なメンタルトレーニングを中心とした心理的サポート実施のための基礎となり、今後のサポートへの資料を提供するものと考えられる。

サポート実施からかなり時間がたっているが、選手たちから十分距離を置くことができたことは有用であり、今回報告する様々なデータは時間的な影響を受けるものでないと考えた。また、数量的な結果については個人情報に配慮するため、統計的に処理して使用した。

2. 方法

①サポートのスケジュールと主な内容: 競技団体の強化プログラムにそって、選抜合宿に合わせてサポートを行う体制をとった(図1)。この研究は該当種目の協会科学委員会(X年当時)の研究費を使用して行った。サポート内容と結果の一部はすでにJOCスポーツ医科学研究報告で報告されている(三宅ほか、1999;杉山ほか、1999)。

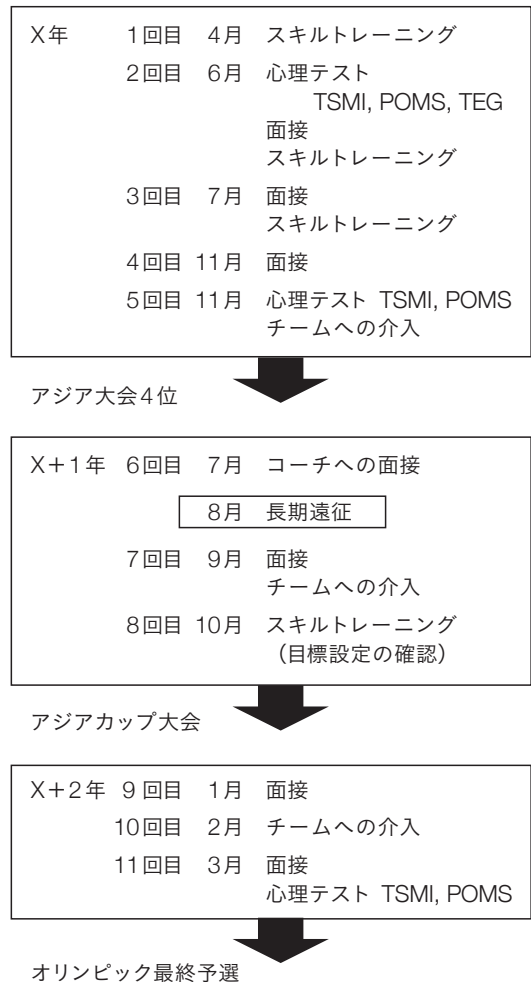


図1. 心理サポートの3カ年のスケジュール

②対象: X年～X+2年バンコクアジア大会ならびにシドニーオリンピック大会予選出場の当該種目の全日本女子チーム、女子30～16名(19～28歳)。サポート対象は補欠選手も含め増減があった。

③心理テスト: 心理状況の把握のために以下のテストを用いた。

X年6月 東大式エゴグラム(新版TEG、金子書房)実施(1回のみ)。

X年6月と11月 TSMI(体協競技意欲検査)実施(2回)、日本版POMS(Profile of Mood States、金子書房)実施(2回)。

いずれも強化合宿中に実施し、結果は選手に知らせた。6月は30名、11月は18名を対象とした。

④面接:3名で分担して合宿中に個人面接を行った。面接の目的は個々の問題を把握するためであった。順番に部屋に入ってもらって時間を均等にするように心がけたが、話が長引いた選手もいた。内容としては臨床的な面接ではなく、個人面談であった。個人カードに記入させて簡単なフェイスシートを作成し、選手歴を確認するところからスタートした。話をしたくない選手はカード作成だけで終了した。担当者をできるだけ固定したが、面接担当者が合宿に参加できないときには、対象者の了解をとり、そのときに参加していた研究者が代理で面接を行う場合もあった。選手一人一人の個人カードを利用して、継続した面接になるように心がけた。

⑤サポート者の資格等について:研究した時点では、日本スポーツ心理学会のメンタルトレーニング指導士資格は充足前であった。その後、全員がメンタルトレーニング指導士を取得した。

3. 心理テストの結果から見た チーム選手の特性

チーム全員への心理サポートを計画したため、個人の心理状態を把握するために、サポートの最初に対象者の心理特性を調査した。TEGは集団での他者との交流における性格特性を把握するために使用し、TSMIは、チーム全体と個人の競技動機を把握するために用いた。POMSは心理状態を知り面接の手がかりを得るために用いた(サポートのたびに簡易版も用いたが今回は報告しなかった)。ここでは、個人ではなく、全体の様子を報告した。

①エゴグラムの分類パターン

エゴグラムは人間の「自我」の状態をグラフ化して

示したもので、心理状態を診断するために使われている。このテストでは自我は親的自我(CP:批判的な親、NP:養育的な親)、大人の自我(A)、子どもの自我(FC:自由な子ども、AC:順応した子ども)の5要素からなり、プロフィールに示された5要素のバランスとどの要素が主導権を持っているかの2つの観点で現在の行動の状態を判定するものである(TEG研究会、1991)。

エゴグラムは16名のデータが得られた。NP優位型(世話焼きタイプ)3名、FC優位型(自由奔放タイプ)1名、NP低位型(イライラタイプ)1名、A低位型(空想家タイプ)2名、U型(いじけやすいタイプ)1名、N型(お人よしタイプ)2名、逆N型(孤高の人タイプ)2名、逆N型(プレイボーイ・タイプ)2名、逆N型(思い込みタイプ)2名であった。

自他ともに厳しいU型、逆N型が7名に上ることが特徴と言える。

②TSMI検査のプロフィール

17下位尺度は1. 目標への挑戦(CHG)、2. 技術向上意欲(WAS)、3. 困難の克服(OD)、4. 練習意欲(MP)、5. 情緒安定性(CJ)、6. 精神的強靭さ(MT)、7. 闘志(FS)、8. 競技価値観(VA)、9. 計画性(P)、10. 努力への因果帰属(AE)、11. 知的興味(II)、12. 勝利志向(WM)、13. コーチ受容(C)、14. IAC(コーチ不適応)、15. 失敗不安(FA)、16. 緊張性不安(TA)、17. 不節制(L)であり、14から17までは、段階点が高いほどマイナス傾向である。

TSMI尺度を9段階(松田ほか、1982)であらわしたものが図2である。図2はX年の6月が●で、○が11月のものである。とくに大きな変化は見られないが、マイナス要因である人間関係、競技不安、生活習慣は得点が低く、大きな問題は見られなかった。その後、X+2年3月調査での18名の平均を▲で図2に追加しプロットした。選手が一部入れ替わっているので、サポートと直接関連するのではなく、その時点のチームの様子ととらえられる。

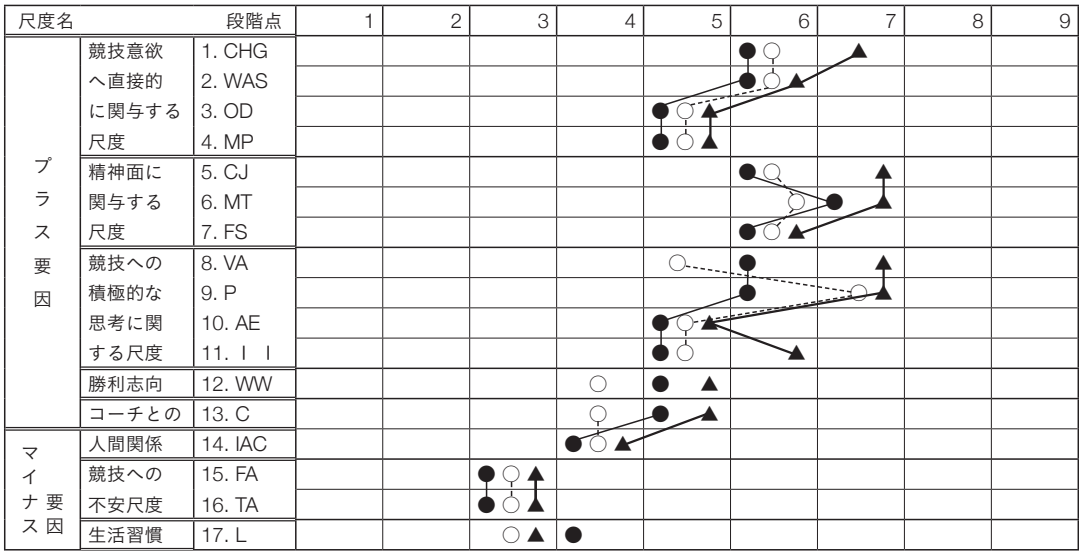


図2. X年6月と11月、X+2年3月のTSMIの平均プロフィールの比較 ●:6月 ○:11月 ▲:3月

表1. 国際経験の有無によるTSMI得点の違い (X年6月)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		目標への挑戦	技術向上意欲	困難の克服	練習意欲	情緒安定性	精神的強靭さ	闘志	競技価値観	計画性	努力への因果帰属	知的興味	勝利志向性	コーチ受容	コーチ不適応	失敗不安	緊張性不安	不節制
経験あり	n	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14
	平均	24.3	25.1	23.8	19.6	21.6	23.2	27.2	23.6	22.4	25.1	23.1	21.1	22.1	16.3	14.4	15.4	15.6
	標準偏差	4.0	3.8	4.5	4.6	3.2	3.8	3.3	5.0	3.5	3.5	4.3	3.5	2.7	3.0	5.5	3.7	2.7
経験なし	n	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16
	平均	22.1	23.7	22.3	18.3	18.1	18.8	26.2	21.7	20.3	25.2	23.6	19.8	21.2	19.9	21.0	20.8	17.8
	標準偏差	3.3	2.8	3.5	3.4	2.5	3.0	2.6	3.8	2.9	3.5	3.9	4.3	3.1	4.5	4.5	2.5	2.2
t値		1.61	1.22	1.61	0.85	3.33**	3.54**	0.96	1.21	1.86	0.03	0.28	0.96	0.90	2.52*	3.66**	4.80**	2.46*

** : P < 0.01 * : P < 0.05

表2. 国際経験の有無によるTSMI得点の違い (X年11月)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
		目標への挑戦	技術向上意欲	困難の克服	練習意欲	情緒安定性	精神的強靭さ	闘志	競技価値観	計画性	努力への因果帰属	知的興味	勝利志向性	コーチ受容	コーチ不適応	失敗不安	緊張性不安	不節制
経験あり	n	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
	平均	26.7	26.2	24.8	19.5	22.0	24.7	27.1	27.0	24.4	25.5	24.9	22.1	20.1	14.1	13.5	13.8	14.1
	標準偏差	4.0	3.2	4.7	5.1	3.9	3.7	2.8	3.0	3.3	2.9	4.2	3.3	1.6	3.8	4.3	4.2	3.8
経験なし	n	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
	平均	23.8	23.7	23.7	18.5	21.3	21.2	27.8	22.7	22.7	25.7	25.2	21.7	21.3	16.3	17.0	17.2	17.5
	標準偏差	2.1	2.7	3.3	3.8	1.8	2.1	1.6	1.6	2.0	2.6	3.0	3.1	2.2	1.8	3.5	2.0	3.9
t値		1.60	1.63	0.54	0.42	0.40	2.15*	0.61	3.29**	1.20	0.12	0.13	0.25	1.38	1.36	1.74	1.86	1.79

** : P < 0.01 * : P < 0.05

国際大会への参加経験が競技意欲(TSMI)に関連するかを比較したものが表1, 2で、9段階にプロットしたものが図3と図4である(X年6月経験者14名、非経験者16名。X年11月経験者12名、非経験者6名)。下位尺度ごとに対応のないt検定を行っ

た結果、チーム編成の固まっていなかった6月では経験者のほうが精神面に関する尺度得点が高く(5. 情緒安定性t=3.3 P<0.01、6. 精神的強靭さt=3.5 P<0.01)、経験のないものはマイナ要因が大きかった(14. コーチ不適応t=2.5, P<0.05、15. 失敗不安

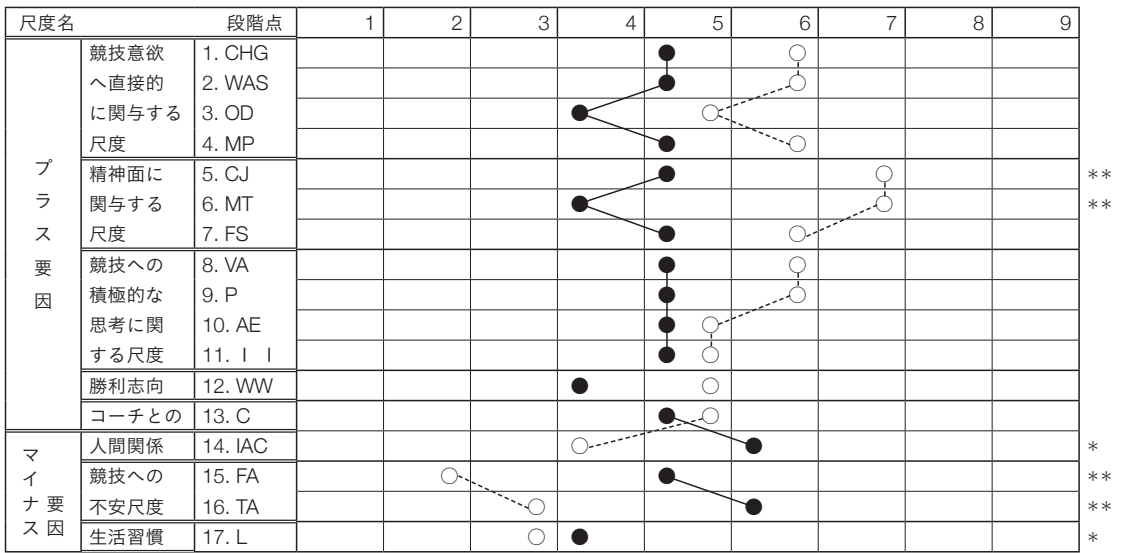


図3. 国際大会経験の有無によるTSMIのプロフィールの比較(X年6月)

○経験あり ●経験なし

** : P<0.01

* : P<0.05

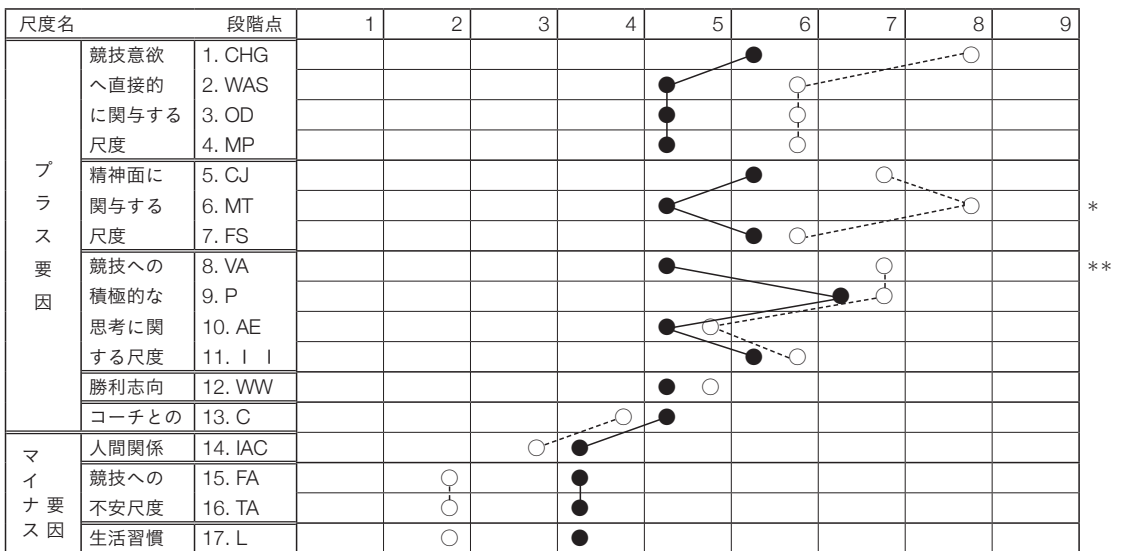


図4. 国際大会経験の有無によるTSMIのプロフィールの比較(X年11月)

○経験あり ●経験なし

** : P<0.01

* : P<0.05

t=3.7, P<0.01, 16. 緊張性不安 t=4.8, P<0.01, 17. 不節制 t=2.5, P<0.05)。アジア大会直前の11月では、2下位尺度で有意差が認められ、とくに精神面、競技意欲に関する尺度で経験者の方がプラス方向の得点が高くなったことが特徴であった(6. 精神的強靭さ t=2.2, P<0.05, 8. 競技価値観 t=3.3,

P<0.01)。

また、先発メンバーと控えメンバーの得点の違いも検討したが差は認められなかった。このことから、経験が競技意欲に関連する可能性を指摘でき、サポートでは経験の浅い選手への意欲向上の方向づけ・配慮が必要であると考えられる。

③POMSテスト

POMSテストは、T-A緊張、D抑うつ、A-H怒り、V活気、F疲労、C思考の混乱、の6下位尺度からなる。図5はアジア大会直前のPOMSテストの結果を示したものである。V尺度(活気)が高く、D尺度(抑うつ)も少し高いものの、全体としては落ち着いて、疲労も高くない良好な状態を示した。

図6は、図5のデータを全日本参加経験の有無によって分け、プロフィールの違いを示したものである。経験の浅い選手のD尺度(抑うつ)がやや高く、C尺度(思考の混乱)は有意に高かった($t=1.9$, $P<0.05$)。経験者のほうは活動性の高い氷山型に近いプロフィールとなった。ここでも経験の重要性が指摘できる。

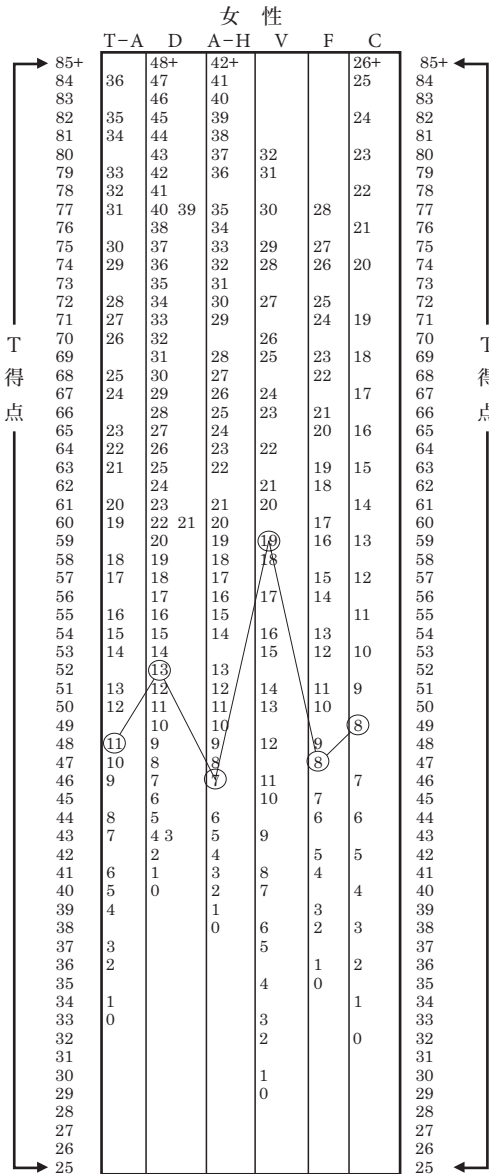


図5. POMSテストのプロフィールの(X年11月)

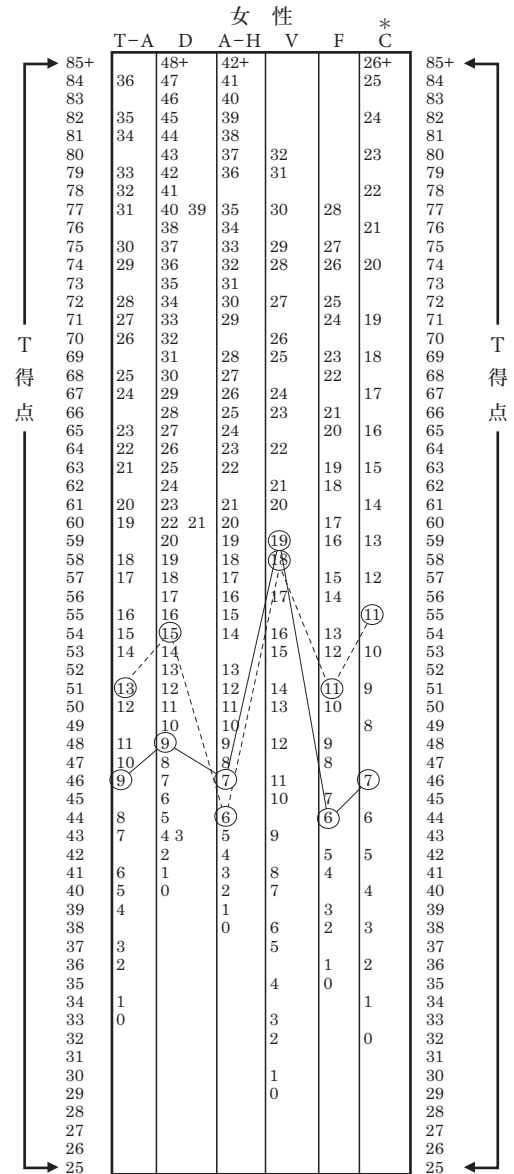


図6. 全日本チーム参加経験の有無別POMSテストプロフィールの比較(X年11月)

—— 経験者 - - - - 未経験者 * : $P<0.05$

4. サポートの経過と選手の反応について

サポートの対象になった選手は最大30名であったが、各合宿期に参加した選手は20名前後で、多数の選手が常に競争する状況であった。また、中心となる10名前後の選手はほぼ確定していたが、当落上の選手や故障者の入れ替えなどチーム種目特有の状況があり、そのことが選手たちの心理面に重要な影響を与えていたと考えられる。したがって、以下のまとめは、選手が固定されたものではなく、人数の増減もある流動的な状況でのものであった。

① X年のアジア大会までのサポートについて

X年はチームの大きな目標があり、サポートは年間5回関わった。初年度で選手・監督・コーチといった競技団体自体の物の考え方や練習の雰囲気などについてもサポート側が慣れる必要があった。選手はメンタルトレーニングの必要性について、以下のような反応であった。非常に必要4名、必要6名、必要ではない1名(回答した者のみのデータ)。好意的であったと言える。

面接

6月の最初の面接は、研究者2名で全部の選手(24名)と夜のミーティングのあと面接を行った。そのため夜中の12時すぎに終了した。このようなサポートは初めてであったため選手に戸惑いがあった。この時点でのPOMSの結果は、多くが疲労感が高く、大学・実業団から選抜された選手から構成されていたためか環境適応への緊張が見られた。7月の面接は選手の入替えが何名かいた。選手選考直前で当落線上の選手の精神が不安定であった。11月は面接時にチームに関する半構造化した質問を試みた。比較的肯定的な反応が多かった。11月は研究者が1名しか参加できなかったため、面接は行わず希望者に部屋を開放したが来室者はいなかった(三宅ほか、1999)。

スキルトレーニング

4月 スキルトレーニングの実施方法等の解説、

講習。内容は自己分析、目標設定、心理的スキルの講習であった。6月 プランの作成、プラス思考の講習を行った。7月 メンタルスキルトレーニングの個人的指導。課題と資料の配布を行った。11月心理的コンディションづくりの確認を行った(杉山ほか、1999)。このとき研究グループの1名がスキルトレーニングを専門に担当することにした。

面接終了後には監督・コーチたちと選手について意見交換する時間をとった。この点については後述する。X+1年7月に監督と面接しアジア大会の様子を語ってもらった。監督はアジア大会を通して選手が成長したという実感を持っていた。

② X+1年のサポート

夏に長期海外遠征があり、主力以外の選手は一部入れ替わった。9月に久しぶりに個々の選手に面接できたが、新しく加わった選手に戸惑いが多かった。全体ミーティングの場で、チームプレイの問題をあげて、議論させるなどの介入を行った。10月の合宿では目標設定に重点を置いて、年末のアジアカップへの方向づけに介入した。具体的にはチームの目標、自分の役割、試合への意欲などを簡単なりストに基づいてチェックし、統一した目標を確認させた。

面接に選手がなれてきた反面、X+1年後半から心理的なスキルトレーニングは個人的指導が必要な局面を迎えた。以後は面接で状況を確認しながら心理的スキルも指導することにした。これは心理的スキル指導が個別指導になって、面接との棲み分けが難しくなったためである。結果的には面接を中心にしながら、面接で心理的スキル指導が必要と感じた選手には可能な限り面接担当者がサポートするようにした。この時点でスキル指導専門の1名が不参加となり、サポートは3名体制となった。

③ X+2年のサポート

オリンピック最終予選を3月に控え、1月、2月、3月と合宿にあわせてサポート依頼があった。1月、3月は個人面接、サポート要員の都合のつかなかっ

た2月には1名だけでチーム全体への教育的介入を行った。

1月

サポート要員が3日間に分かれて関わった。多くの選手は面接に慣れ、かなり本音で話すようになった。この時期に補欠にまわる選手もいて、彼らの精神的なケアや自己評価の低下のケアに時間を割く必要が生じた。この種目では競争状態を続けて選手を絞っていったので、選手の選考に対する関心や自己評価の低下、また職場での期待によるプレッシャーも出現した。心理的スキルトレーニング(目標設定など)を実施し、試合に向けた「ワンポイントアドバイス」冊子を共同研究者の1名が作成し配布した。

選手の立場から見ると入れ替わり立ち替わり心理サポートメンバーが参加したので、自分たちが注目されていると感じたかもしれない。

2月

サポートは1名しか参加できなかった。ミーティング観察と全体へ講義(2時間くらい)を行った。講義内容は教育的介入を意図したもので、ミーティングで意思統一ができていないと感じられた「集中力、チームワーク、戦う集団について」と「緊張、不安、他のスポーツ選手の例」をテーマとし、コーチたちも参加した。講義内容のキーワードを示し、選手一人一人に自分の考えを開陳させる場を設けた。

3月

オリンピック最終予選直前の合宿で、個人面接と目標の確認が中心となった。TSMI、エゴグラム、POMSテスト、心理面についての簡単なチェックリストへの回答を実施した。

サポート対象選手は16名であったがチェックリストを回収できたのは6名だけであった。身体面での不安について5名が「なし」と回答、不安は4名が「なし」、プレイで心配なことは5名が「なし」、チームワークへの心配は全員が「なし」と回答、戦術についての心配は5名が「なし」と回答、相手の研究は4名が「できた」と回答、調子が悪くなったらと思うことは3

名が「全くなし」2名が「たまにある」と回答した。

全員が代表選手であったので、目的意識は明確で、サポート場面で多くの不安を訴える選手は見られなかった。面接担当者と自由に話ができる関係ができていた選手からは、自分の抱える問題が示された。それに対してのサポートとしてはできるだけポジティブな視点を持てるような方向づけを心がけた。このような試合直前の状況では特定のスキルトレーニングではなく、個々の問題に応じたサポートが重要だと思われる。また、けが、疲労、体力への不安を持つ選手は心理的な不安も増加していたので、心理的なコンディショニングの基盤は身体的なコンディショニングにかなり依存するのではないかと考えられた。

④サポートの終了

オリンピック最終予選の結果は敗退で出場を逃した。その後は新しい監督の元でチームを結成することとなり、当該種目の科学委員会のメンバーも入れ替わった。協会からの依頼でサポートを行ったのではなかったため、自動的にサポートも終了した。

5. 考察

複数でサポートに関わった効果と問題をまとめた。

①サポートの効果

本研究では、心理テストを用い、個人、チームの心理状況をデータとして記録、提示した。このことは客観的な資料としての価値を認めてよいだろう。さらに、チームサポートに個人の問題解決の手法である面接法を取り入れたことが新しい試みであると言える。時間経過とともに話すことに選手が慣れていき、様々な話を聞くことができた。しかし、本研究は10年以上前に実施されたものであり、研究時に選手に研究参加への説明と同意を得ることが十分に行われなかったことが問題として挙げられる。

競技成績から見ると、対象チームの最終目標であったオリンピック大会出場はできず、心理的サポートの効果は競技成績に十分に反映されたとは言えない。しかし、監督・選手のサポートへの関心は回数を追うごとに友好的になったことは実感することがで

きた。このとき関わった選手たちが2004年にアテネで行われた夏季オリンピック大会出場の主力選手となっていった。

②チームサポートの方法についての方向性

身体トレーニングに多くの時間を割く必要のあるチーム種目では、心理的な問題解決に十分な時間が取れない。その状況で心理的なサポートが可能であるかについて、この報告では肯定的に方向づけができたと思われる。しかし、チームへの効果的なサポートが完成するためには次にあげるような条件が必要となるだろう。

まず、競技関係者の協力体制である。サポートに理解を示して合宿中に時間をとることができたことは非常に重要な点であった。また、発展途中の競技種目であったことも新しい試みには有効であった。

次に議論すべき点は、選手の情報の守秘の問題である。今回はサポート者同士で情報交換する時間を設け、内容によっては監督・コーチに情報を伝えた。これは指導者が選手の心理面の様子に強い関心を示したことで、心理サポートのみで解決できない問題を含んでいる場合は監督と双方向からのアプローチが選手にとって好ましいと判断した場合である。この点が個人として選手にサポートする場合とは異なると考えられる。しかし、守秘義務、責任の所在については参加した研究者間でも議論がわかれた。

そのほかに直接にはサポートと関わりないマネジメント(とくに情報の共有)や費用が問題として挙げられる。

面接チームがチームに帯同しサポートするには、これらの条件を整えることが必要であろう。したがって、現実的には状況に応じて、個々の選手への個別サポートをする、一人の心理学者が全体をサポートする、など柔軟なサポート方法の選択を考えるべきである。

心理的サポートが常駐できたほうが好ましいかは今回の結果だけでは結論できない。ただし、人数の多いチームスポーツに心理的サポートをするには、一人のサポートでは困難が多いので、サポート側もチームで取り組む体制ができれば状況に対応しやす

いと思われた。

今回は研究主導でスタートしたサポート活動であったため、競技団体関係者に十分重要性を理解してもらうまでに至らず、競技団体を支える個人に依存(当時の監督)したため、継続的なサポート体制を確立することはできなかったことが反省としてあげられる。

6. まとめ

心理テストTSMI、POMSの結果では時間経過に伴うプロフィールの変化は軽微なものであり、むしろ国際経験の違いによる差が見られた。アジア大会直前のPOMSテストは活気が高く良好な感情状態を示した。今回面接を用いた心理的サポートは全部で5回、年に1回のときもあり、個人に影響を与えるところまで十分には関われなかったと考えられる。

また、一人一人の結果をみると個人差が大きく、エゴグラムに代表されるような心理特性と他のテストを関連させた総合的な判断がサポートでは重要なファクターになると考えられる。その他にチームでは他の様々な要因が含まれており、サポートの効果を論じるには、ケースバイケースの要因と共通の要因を抽出することで、サポートをより効果的に行うことができると思われる。

引用文献

阿江美恵子(2003) The Sport Psychologist誌におけるメンタルトレーニング研究の動向 —過去10年間(1992年～2002年)— 東京女子体育大学紀要38: 33-40.

Ae, M., Endo, T., Miyake, N., and Sugiyama, T. (2001) Psychological intervention in the Japan women's national field hockey team: (1) A team building, 10th world congress of Sport Psychology Programme & proceedings vol. 4th, 87-88.

Bull, S. J. (1995) Reflection on a 5-year consultancy program with the England Women's cricket

- team, *The Sport Psychologist*, 9-2: 148-163.
- Endo, T., Ae, M., Miyake, N., and Sugiyama, T. (2001) Psychological intervention in the Japan women's national field hockey team: (2) The psychological effects of the Asian games in 1998, 10th world congress of Sport Psychology Programme & proceedings, vol. 4th, 99-101.
- 猪俣公宏、阿江美恵子、岡沢祥訓、佐久間春夫、武田徹、中島宣行、山本勝昭、金子敬二 (1991) No. VII チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究 平成2年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 2)、1-107.
- 猪俣公宏、阿江美恵子、岡沢祥訓、佐久間春夫、武田徹、中島宣行、山本勝昭、米川直樹、金子敬二 (1992) No. III チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究—第2報— 平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 1)、1-78.
- 猪俣公宏、阿江美恵子、石井源信、遠藤俊郎、佐久間春夫、武田徹、中川昭、中島宣行、米川直樹、山本勝昭、雨宮輝也、岡田純一 (1993) No. III チームスポーツのメンタルマネジメントに関する研究—第3報— 平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 1)、1-120.
- 猪俣公宏、石井源信、遠藤俊郎、武田徹、中川昭、白山正人、雨宮輝也、岡田純一 (1994) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究—第1報— 平成5年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 1)、1-99.
- 猪俣公宏、石井源信、遠藤俊郎、岡沢祥訓、中川昭、白山正人、雨宮輝也、岡田純一 (1995) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究—第2報— 平成6年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 1)、1-135.
- 猪俣公宏、石井源信、遠藤俊郎、岡沢祥訓、中川昭、白山正人、雨宮輝也、森丘保典 (1996) No. III ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究—第3報— 平成7年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 1)、1-181.
- 猪俣公宏、栗木一博、石井源信、遠藤俊郎、岡沢祥訓、妹尾江里子、山本勝昭、吉本俊明、森丘保典 (1997) No. III 冬季種目のメンタルマネジメントに関する研究—第1報— 平成8年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 2)、1-104.
- 猪俣公宏、栗木一博、石井源信、遠藤俊郎、岡沢祥訓、妹尾江里子、山本勝昭、吉本俊明、森丘保典 (1998) No. III 冬季種目のメンタルマネジメントに関する研究—第2報— 平成9年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集 (VOL. 2)、1-81.
- 猪俣公宏、栗木一博、石井源信、遠藤俊郎、岡沢祥訓、妹尾江里子、山本勝昭、吉本俊明、森丘保典 (1999) No. IV 冬季種目のメンタルマネジメントに関する研究—第3報— 平成10年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集、1-70.
- 乾真寛 (1996) '95ユニバーシアード福岡大会「金メダルへの道」現場からの報告4 メンタルトレーニングの導入とその成績 サッカークリニック、3-3: 42-47.
- 金屋佑一郎、高妻容一 (2006) 高校野球チームへの心理的サポートの影響について 日本スポーツ心理学会第33大会研究発表抄録集、88-89.
- 小西徹、高妻容一 (2006) 大学男子ラクロスチームに対するメンタルトレーニングの影響 日本スポーツ心理学会第33大会研究発表抄録集、198-199.
- 高妻容一 (2002) コラム 資格をめぐる海外の状況 日本スポーツ心理学会編 スポーツメンタルトレーニング教本、p. 30、大修館書店:東京.
- 松田岩男、猪俣公宏、落合優、加賀秀夫、下山剛、杉原隆、藤田厚、伊藤静夫 (1982) No. III スポーツ選手の心理的適正に関する研究—第3報— 昭和56年度日本体育協会スポーツ科学研究報告集、1-39.
- 松田岩男、猪俣公宏、上田雅夫、江川政成、大村政男、長田一臣、加賀秀夫、香西俊輔、小杉正太郎、児玉昌久、霜禮次郎、杉原隆、武田徹、徳永幹雄、長谷川浩一、藤田厚、山本勝昭、金子敬二 (1986) No. III スポーツ選手のメン

- タル・マネージメントに関する研究—第1報—
昭和60年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集、1-209.
- 松田岩男、猪俣公宏、上田雅夫、江川政成、大村政男、長田一臣、加賀秀夫、霜禮次郎、杉原隆、武田徹、藤田厚、山本勝昭、金子敬二(1987) No. III スポーツ選手のメンタル・マネージメントに関する研究—第2報— 昭和61年度日本体育協会スポーツ科学研究報告、1-95.
- 松田岩男、猪俣公宏、上田雅夫、江川政成、大村政男、長田一臣、加賀秀夫、霜禮次郎、杉原隆、武田徹、藤田厚、藤巻公裕、山本勝昭、金子敬二(1988) No. III スポーツ選手のメンタル・マネージメントに関する研究—第3報— 昭和62年度日本体育協会スポーツ科学研究報告集、1-120.
- 松田岩男、猪俣公宏、上田雅夫、江川政成、大村政男、岡沢祥訓、長田一臣、加賀秀夫、霜禮次郎、杉原隆、武田徹、藤田厚、藤巻公裕、船越正康、山本勝昭、金子敬二(1989) No. III スポーツ選手のメンタル・マネージメントに関する研究—第4報— 昭和63年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告集(VOL.1)、1-95.
- 三宅紀子、阿江美恵子、遠藤俊郎、杉山哲司、青木紀久代、寺本祐治、小林和典、久我晃広(1999) No. II 競技種目別競技向上に関する研究 No. 19 ホッケー、III 全日本女子ホッケーチームへの心理的サポート(2) —カウンセリング的支援の方法とその実践— 平成10年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集、229-231.
- Miyake, N., Ae, M., Endo, T., and Sugiyama, T. (2001) Psychological intervention in the Japan women's national field hockey team: (3) Development of psychological skills, 10th world congress of Sport Psychology Programme & proceedings, vol. 2nd, 238-239.
- 永田直也、高妻容一(2006) 実業団女子バスケットボールチームにおけるメンタルトレーニングの試み 日本スポーツ心理学会第33大会研究発表抄録集、86-87.
- 西貝雅裕、来田宣幸、高妻容一(2006) 高校バレーボール部における継続的なメンタルトレーニングへの取り組みからみえてきた現在のメンタルトレーニングの課題 日本スポーツ心理学会第33大会研究発表抄録集、84-85.
- 杉山哲司、阿江美恵子、遠藤俊郎、三宅紀子、寺本祐治、小林和典(1999) No. II 競技種目別競技向上に関する研究 No. 19 ホッケー、II 全日本女子ホッケーチームへの心理的サポート(1) —メンタルスキルトレーニングの実践— 平成10年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集、227-229.
- 白石豊(1997) 実践メンタル強化法. 大修館:東京.
- TEG研究会編(1991) TEG活用マニュアル・事例集. 金子書房:東京.
- 付記
データの公表が遅れたことを共同研究者に心よりお詫び申し上げます。